

近代文学研究叢書

昭和女子大学

近代文化研究所

近代文学研究叢書

第六十九卷

平成7年3月20日 初版印刷発行

定価 8,240 円 (本体 8,000 円)

著者	昭和女子大学近代文学研究室
発行者	外山滋比古
印刷所	大文堂印刷株式会社
発行所	昭和女子大学近代文化研究所 東京都世田谷区太子堂一―七 電話 03 (三四二一) 五一一九番 振替口座 〇二四二一七〇八六七

ISBN 4-7862-0069-7 C3091 P8240E

目次

口 絵	二
『近代文学研究叢書』の成立	五
凡 例	七
前 田 夕 暮	三三
林 芙 美 子	四三
岡 麓	五三
福 井 久 蔵	六三
PROFILES	六九
卷末付記	七二
第六十八卷年表補遺	七六
索 引	七六

『近代文学研究叢書』の成立

『近代文学研究叢書』は昭和三十一年一月、昭和女子大学光葉会からその第一巻が発行された。以来、明治期全十二冊、大正期全十三冊、昭和期が本巻を加えて四十四冊を刊行、続刊中である。

本叢書は、創立者人見圓吉（東明）が建学の精神に基づき優れた研究者の養成を目的とし、これによって文学日本の近代相がいささかでも究明出来ればという強い願望により創められたもので、本学学生による近世の国文学者、洋学者についての研究調査をまとめた『文学遺跡巡礼』（昭和十三年十月、第一輯発行）が母胎となっている。

昭和二十年、戦争も末期に近づいた四月の大空襲により、本学は校舎とともに蔵書と未発表原稿の一切を焼失した。青年時代、三木露風、野口雨情らとともに早稲田詩社をおこして活躍したかつての詩人東明は、この時から明治の詩書をはじめ近代文学関係の文学書の蒐集にとりかかり、現在の近代文庫の基礎が固められた。神田の古書展では「文学書の値をつり上げる」という評判が立つほどの蒐集ぶりで、こうして蒐められた典籍をもとに近代の文学者、思想家約八百名の伝記、業績に関する資料文献の老大なカードの作成には日本文学科の学生が総動員され、『近代文学研究叢書』の基礎的資料の基盤が築かれたのである。なお、母胎となった『文学遺跡巡礼』はその名の示す通り、生涯と業績に加えて遺跡の实地踏査、遺族の訪問記を特色としたが、本叢

書はこの特色をそのまま踏襲している。すなわち、文学者の遺族を訪ね墓所や遺跡を踏査することによって、業績を含めたその全体像を闡明しようとするものである。また、著作と資料に関する年表調査も平行的になされ、網羅的な資料蒐集に意を注いでいる。業績については各専門分野における学界の權威に指導を仰ぎ、特に、発足当時の基礎固めには月曜会(学内における近代文学の研究)での研鑽が大きな支えとなった。

第一巻では明治三年二月歿のB・J・ベッテルハイム、八田知紀、S・R・ブラウン、J・R・ブラック、成島柳北、森有礼、新島襄、佐佐木弘綱、中村正直ら九名が収められ、以後歿年順に収録された文学者、思想家はこれまでに三百余名を数え、本巻を以て通巻六十九冊に及んでいる。その間、第六巻発刊の昭和三十三年に本叢書は菊池寛賞を受賞している。

なお、創刊当初から監修者として叢書の全般にわたりご指導、ご助言をいただいた方ですでに物故された諸先生を左に記して感謝の意を表したい。

秋庭 太郎 (演劇学)	池田 亀鑑 (国文学)	石田 吉貞 (国文学)
石森 延男 (児童文学)	上井 磯吉 (英文学)	太田 三郎 (比較文学)
萩原井泉水 (俳文学)	片桐 顯智 (和歌文学)	金子 健二 (英文学)
金子 武雄 (国文学)	河鱈 実英 (歴史学)	木俣 修 (和歌文学)
木村 毅 (比較文学)	斎藤 一寛 (仏文学)	坂本由五郎 (英文学)

佐々木八郎 (国文学)	笹沢 美明 (独文学)	佐藤 幹二 (国文学)
山宮 允 (英文学)	島田 謹二 (比較文学)	玉井 幸助 (国文学)
辻村 鑑 (英文学)	内藤 濯 (仏文学)	成瀬 正勝 (近代文学)
能勢 頼賢 (国語学)	浜 徳太郎 (美学)	人見 圓吉 (近代文学)
本間 久雄 (近代文学)	宮内 秀雄 (英語学)	矢野 峰人 (英文学)
吉田 澄夫 (国語学)		

本巻には、歌人前田夕暮 (明治十六年七月二十七日〜昭和二十六年四月二十日)、小説家林芙美子 (明治三十六年十二月三十一日〜昭和二十六年六月二十八日)、歌人・書家岡麓 (明治十年三月三日〜昭和二十六年九月七日)、国文学者福井久蔵 (慶応三年十一月十八日〜昭和二十六年十月二十三日) の、四名の研究調査を収めた。

凡 例

一 著作年表は、発表が生前と死後とを問わずその作者の作品のすべてを収め、資料年表は、第三者の考説、評論、感想等の文献を収めた。単行本の中での編集物は、所要の小題を書題名欄に、書名と発行所を誌紙名欄に、小題の執筆者を筆者欄に掲げ筆名、筆者名は掲載誌紙の表記にしたがった。

二 年表記載で、調査者が直接あたれなかった項目については☆印を付した。

三 各稿の末尾に「採訪」と「参考文献」を掲げたのは、研究調査の際に訪問して教示を仰ぎ、便宜を与えられた方々に感謝の意を表し、また、資料の出处、起稿や修訂にあたって参考にした文献の依拠を明らかにするためのもので、「参考文献」は資料年表と一部重複することがある。

四 表記はすべて現代仮名遣い、常用漢字を用いた。但し、人名は、各研究対象者に限り旧漢字で表記した。

五 引用文の表記は仮名遣いは原文にしたがい漢字は常用漢字を用いた。外国文の場合は訳文または大意を添付する。なお原文中の誤りや疑わしい箇所は右側に（ママ）と記した。

六 年代は日本年号と西暦とで適宜表記し、どちらからでも検索できるようにした。年齢は満年齢を用いた。

前^{まえ}

田^だ

夕^{ゆう}

暮^{ぐれ}

昭和二十六年（一九五三）七月二十七日
昭明
和治
二十
六年
（一
九八
五）
三
四月
二十
七日
歿生

一生 涯

イ 出生・少青年期

前田夕暮は明治十六年（一八八三）七月二十七日神奈川県大住郡南矢名村字小南（後、中都大根村南矢名、現、秦野市南矢名二三四）に、父久治、母イセの長男として誕生。本名を洋造、洋三とも書いた。前田家は代々庄屋、戸長の家柄で、屋号を「油屋」といった。祖父代次郎は南矢名村の戸長をつとめ、落花生や、煙草を栽培し、食用油・醬油を販売する「油屋」を営む傍ら、秦野木綿の取り引きを共同で行って産をなし、豪農達の出資になる金融会社「共伸社」の株主でもあった。父久治は、「一徹者」で、「祖父が父と相容れぬところのあつたのは、性格的に父子とも同型であつたためであつたらう」（素描 昭15・12）とあるように正義感強く、代次郎の豪農の生き方に反撥した。折柄、板垣退助の自由党の結成（明14・10）による自由民権の思想が波及、学習政社、湘南社・相愛社、融貫社が相次いで結成され、久治は湘南社の新鋭として明治十六年三月に入党。本格的に民権運動に従事し、資金カンパ、講習所運営経費の割り当て等により彼の民権運動は「油屋」の資産の消尽へとつながり、祖父代次郎との確執を招き、代次郎は財産の三分の二をもって秦野に隠居した（前田透「評伝前田夕暮」昭54・5）。夕暮は父二十一歳、母二十歳の時の子供で、母イセは「極く内氣のつましやかな人で、何でも父のいふ

なりに順応してゐた」(素描)おとなしい性格で、シカ、イネ、次郎、ナミ、ユキ、滋の三男四女を育て世帯を切り盛りした。明治二十一年、夕暮五歳の時、妹シカをいじめて父に叱責され、祖父の家に家出、これを手始めに逃亡の癖がついた。明治二十二年五歳で大根小学校に入学。その八月、父久治が神奈川県会議員選挙に当選、三年後には大根村長に就任した。明治三十一年、入学以来首席を通した小学校の高等科四年を卒業、三郡共立中学校(中郡中学校、現、秦野高等学校)に入学した。その頃、社交性がなく、村人から尊敬はされたが、慕われる方ではなかった厳格な父への反撥と、長男としての負担の重さに耐えられず、腺病質型で病弱な夕暮は、不眠に苦しみ、二年進級の頃、神経衰弱にかかった。父久治は夕暮を医者にするつもりであったが、夕暮は明治三十二年春、法律を勉強していた叔父貞蔵を頼って無断上京した。然し父久治の心が解け、家から書籍や寝具の届く頃には、夕暮の病はつのり、ただ下宿で寝るだけで、七月、叔父に追い立てられ帰郷したが、病は重くなるばかりで、遂に休学、のち退学した。初冬の頃小康を得、医師のすすめで療養の一方法として村田銃を持ち「若き獵人」(素描)となつて山野を駆け回り、この頃から雑誌「文庫」を購読した。が、十一月初旬、再び出奔。父の顔を見るのが苦しく、旅費十円と新派和歌集『くさぶえ』、紀行文『千山万水』を携え、腰に矢立、股引に草鞋穿き、破れ洋傘という出で立ちで、放浪の旅に出たのである。汽車で三島に一泊、沼津、浜松、名古屋と歩き、熱田から船で鳥羽へ、奈良、大阪、京都を巡つて約一ヵ月で帰宅。父の相変わらずの苦い顔に明治三十四年一月末、脳病に効果のある伊豆山温泉の相模屋に宿泊、同宿の阿部青年から桂月、紅葉、露伴の知識を得、桂月の『黄菊白菊』を読んだ。帰途、天城を越え、下田を巡つて帰郷したが、家に安住でき

ず、山野を歩き不平と無聊を發散。その間学校を思いきれず、たえず『和田守記憶法』を懷にしていた。

翌明治三十五年春、第二の旅に出る。常磐線を歩き、水戸、大甕、助川、勿来、松川浦、仙台、松島を巡って一の関から巖美溪をめぐり平泉に出て、約二ヵ月放浪した（『素描』）。この旅中『みだれ髪』を懷にし、愛読することで文学志向開眼が行われ、夕暮の晶子撰取が始まり、以後五年間に晶子模倣の歌約四千首を作ったのである。六月初旬帰宅すると、父久治は夕暮の前途を、信頼し得る友人、大磯北本町の医師で、久治の民権運動の同志天野政立の弟、天野快三に託し、六月末から三十七年三月頃まで夕暮の薬局生の生活が続けられた。

然し、当初の出奔では医師志望であつた夕暮に、この時には「文学志望の芽が土をもたげて、その子葉をあらはして」（『素描』）いたのである。よく薬を盛り間違えて患者に渡したりしながら、近くの善福寺住職伊藤六石に漢文を習った。天野医院の藤棚の木漏れ日を眺めつつ「文学者の生活を空想」（『素描』）し、この頃から夕暮の文学志望が具体化しはじめる。

大磯は古代の相模の国府が置かれた旧余綾郡金綾郷（現、中郡）の海浜で、万葉以来の歌枕。大淀三千風を初代庵主とする鳴立庵で知られ、西行の「心なき身にもあはれは知られけり鳴立つ沢の秋の夕暮」の歌碑がある。夕暮の号はこの歌によつたものといわれ、このころから用いられ、「夕暮子」（『希望の光』新声 明36・9）の署名もある。明治三十五年から三十六年に大磯在住の青年十人ほどで「湘南公同会」を組織し、菊判七八十頁の回覧雑誌「湘南公同会雑誌」を出したが、一号で廃刊。「私の投書時代は、その藤棚の下で薬局から拓かれて行つた」（『素描』）と記すように大磯時代に新聞、雑誌への投稿を開始、「月の白百合」（新声 明36・4）「希望の

光」(新声 明36・9)「孤松」(中学世界 明36・11)など散文投稿家として頭角を表した。短歌の投稿は、「新声歌壇」(新声 明36・6)蕉園選による「君が歌しるされたらむ思ひして流れよるもみちとり見し」の一首が初出で、選者が尾上柴舟になってからは、若山牧水、正富汪洋、有本芳水、三木露風と共に二首以上入選している。

明治三十七年二月、対露宣戦布告がなされ、国内は戦争熱に湧いていた。夕暮はその前年の徴兵検査で第二乙種、国民兵に編入されたので、父に戦争に行く代わりに上京を強請し、同年三月上京、二十歳であった。

口 活躍前期

三年のうちに自立という約束で、学費出資を父に願って上京した夕暮は、叔父貞蔵方へ寄寓した後、神田区南甲賀町十八屋代美津方の下宿に落ち着いた。三年内に文学で自活する困難さをさとした夕暮は、国漢の中等教員の免許を得るため、神田三崎町の国語伝習所と、漢学塾二松学舎(現、二松学舎大学)に学んだ(二松学舎百十年史、昭62・10)。この上京後の事として特筆すべきことは、「尾上柴舟氏の知遇を得たこと」(素描)である。夕暮が初めて本郷区西片町十九の柴舟宅を訪問したのは明治三十七年五月二十五日であった。

前 田 夕 暮
柴舟は東京帝大文科大学卒業後、哲学館(現、東洋大学)講師、漢学塾二松学舎講師(明36辭任)、東京女子高等師範学校(現、お茶の水女子大学)教授の傍ら『ハイネの詩』(明34・11)『叙景詩』(金子薫園共編著 明35・1)等の著者として有名であった。この夕暮訪問の後の柴舟の書簡(明37・7・11付)が夕暮を柴舟に傾倒させ、柴舟中心に結成し

た短歌会「車前草社」に加わる契機となったのである。(前田透「評伝前田夕暮」昭54・5)「車前草社」は、明治三十七年十一月哲学館に出来た金箭会(柴舟中心に夕暮まで二十二名の会)から生まれたもので、明治三十八年夏に創設された。会員の詠草は「新声」誌上に「車前草社詩稿」(又は車前草社詩草)として発表された。会員は当初若山牧水、正富汪洋、夕暮の三人であったが、後に三木露風、有本芳水が加わった。作風は会名の如く「野草の鮮緑と潑刺さをもつて、各自の簡性のまゝに成長しようといふ意図を内蔵」(「車前草社とその頃の思ひ出(1)」短歌研究 昭18・9)したものであった。またこの頃「中央公論」や「文庫」に投稿して、毎回四首以上入選し、「国詩」の創刊にも参画、第一回小集会に出席して、短歌も投稿。明治三十九年春には、夕暮の発案により誌友勧誘のため、鎌倉建長寺で、蒲原有明、岩野泡鳴、生田葵山を講師とした国詩の会講演会を開催した。(「車前草社とその頃の思ひ出(2)」短歌研究 昭18・10)

長岡から上京して夕暮の下宿に來た内藤銀作の言葉に刺激され、新雑誌発刊を思い立った夕暮は、同下宿の高田浩雲と「富山新報」の回覧雑誌「聚雲」を新進詩歌人の舞台となすべく話し合い、三十一年初め、夕暮の勧誘で車前草社同人全員で「聚雲」に入会、牧水は白秋を誘って「聚雲」の文学雑誌化をはかったが、具体化はむづかしかった。「私は当時、歌だけでは自分を支へきれなかつた。歌よりも更らに強力なものに縋りたい」(「車前草社とその頃の思ひ出(2)」)という気持ちから、三十一年五月、夕暮は、当時青山穩田にあった植村正久の青山伝道教会で牧師大谷盧によって受洗した。夕暮の上京後一年も経たぬうちに、同郷の友人松本雲舟(日本初の「天路歷程」の翻訳者)が植村正久宅に連れて行ってくれたのが機縁で、「当時、植村正久の訓へを受けた文壇人

は、国木田独歩を初め、早稻田派に多かつた」（車前草社とその頃の思ひ出（？））という。

明治三十九年夏、横浜県庁での中等教員検定試験に不合格になった夕暮は、文学一本で進む決意をし、雑誌「向日葵」の発行を計画した。「明星」を対象に、若い時代が旧い時代に代わろうとする意気を示そうと、三十九年十月、車前草社同人の牧水、汪洋、露風、芳水と内藤鋳策を同人に白日社を創立、雑誌「向日葵」を発行、「明星」に対抗しようとした。この時、夏目漱石、坪内逍遙など四十余名の作家に新雑誌創刊に賛成を求めている。かくて多彩な執筆者を揃えて、明治四十年一月「向日葵」は発刊されたが、会員が集まらず、資金難のため、翌二月、二号をもって廃刊。一、二号を通し夕暮は一二九首詠作、寄稿者中最も多い。この年の十一月作風転換を試み、自然主義的な歌風を樹立するが、「向日葵」の「白楊はこやなぎなかにふたりは唇くちびるつぐみうしろ歩みに見てわかれける」などに、その兆しがみられる。またパンフレット歌集『哀楽第壹』（明40・11）を白日社から刊行。自序に「哀楽は華かにして、さびしき人生に囚はれたる著者が、真情の叫びなり——洋三——」と三十八首を収め、『哀楽第貳』（明41・1）には「自分の思想は今、理智の筆を以て二つに染め分たれてある。一つは自然人生に対する神秘的色彩で、一つは自然人生に対する憧憬的色彩である。」と自序して三十八首を収録。『哀楽第参』は原稿にまとめたまま未刊に終わった。

明治四十一年五月、「文章世界」の訪問記者となる。同年八月一日、母イセ癌のため逝去（四十五歳）、夕暮の心の傷手は深く、後年母の思い出を『青天祭』（附18・2）に綴っている。明治四十二年一月「文章世界」を辞し「秀才文壇」の編集者として小川未明のあとを継ぎ、文光堂へ入社、初めて定職を得、竹久夢二と知り合い

『夢二画集』出版に協力する。この年「新声」(1、3、7、11月)「文章世界」(3、11月)「趣味」(1、5月)などに投稿。明治四十三年三月「創作」の創刊に編集同人として参加、「卓上語」「歌十六首」を寄せている。同月、易風社から処女歌集『収獲』七百部を出版(自費出版)、十月増補再版を東雲堂より刊行。四月出版の牧水の『別離』と並び自然主義歌集として注目された。同年五月一日栢野繁子(狭山信乃)と結婚、青櫛に囲まれた西大久保に新居を構えた。繁子とは「聚雲」以来の恋人、「秋の夜はふけし隣の妻の部屋帯やとくらしこほろぎのなく」幸せな日々であった(素拙 昭15・12)。七月パンフレット歌集『疲れ』刊行。六月に人見東明と交代していた「秀才文壇」の編集に復帰する。明治四十四年四月、雑誌「詩歌」を白日社より創刊、同誌は多くの文学者を詩歌壇に輩出した。年末より一月上旬まで繁子と銚子犬吠崎に遊ぶ。大正元年九月十五日第二歌集『陰影』を白日社より刊行。自然主義的作風を深めて行く傾向がみられ、啄木の『悲しき玩具』と共に大きな反響を得た。ことに「アララギ」(大元10、11)誌上で「陰影」ほか三編の論評が寄せられている。大正二年二月繁子と三浦三崎に遊ぶ。この頃詩歌研究会の「短歌個人通信教授」の講師となる。四月十一日、啄木一周忌追悼茶話会で伊藤左千夫に会う。同月、白樺の西洋美術展を見学、ゴーギャン、ゴッホに傾倒する。五月中野の監獄を見学して詠作し、九月には巣鴨の精神病院に茂吉を訪れ、病院を見学、「狂病院を訪ひて 歌二十五首」(『生くる日に』大3・9収載)を詠出している。

八 活躍後期